

古英語の副詞的対格が表す時間的継続の

アスペクト的解釈について：

境界性、粒度の観点から¹

中西 志門

京都大学大学院

kanjizaibosatu@suou.waseda.jp

要旨：本稿は、従来継続性を表すとされてきた古英語の副詞的対格の時間的意味をアスペクト論的観点から再検討し、実際には継続を表すとは言い難い用例が存在することを指摘する。また、その明確な時間的意味の分類が困難であることから、動詞・名詞・修飾語の意味素性をもとに時間的意味を記述することを提案する。

古英語の副詞的格の時間的意味は、継続・時点・反復に区分されてきた。しかし、その分類基準が提示されていることはなく、同じ用例が先行研究により別様に判断されることもあった。

そこで本稿は、客観的には同じ長さの時間も、捉え方（粒度）の違いにより、時点とも継続ともみなせるという立場に則り、副詞的格の時間的意味の記述には、修飾語などで表される話者の主観的な捉え方に着目する必要があると主張する。その上で、動詞、主要部名詞、修飾語の意味論的特徴を併せて、より継続的・より点的と記述する手法が現実的に即していると主張する。

キーワード：古英語、副詞的格、副詞的名詞、アスペクト、粒度、telicity

1. はじめに

古英語は名詞に主格、属格、与格、対格を、代名詞や一部形容詞にこれらに加えて具格を有していた。

¹ 本稿は一部、第39回中世英語英文学会ポスターセッションで発表した内容を含んでいる。また、本研究はJSPS科研費JP21J11676の助成を受けたものである。

Table 1 古英語の名詞曲用体系 (Campbell 1983: 224–25, 290)

se dæg ‘the day’, þæt gear ‘the year’, seo niht ‘the night’

	m.		n.		f.	
	SG.	PL.	SG.	PL.	SG.	PL.
NOM.	dæg	dagas	gear	gearas	niht	niht
GEN.	dæges	daga	geares	gears	nihte(s)	nihta
DAT.	dæge	dagum	geare	gearum	nihte	nihtum
ACC.	dæg	dagas	gear	gearas	niht	niht
INSTR.	dæge		geare			

Table 2 古英語の代名詞曲用体系

	m.		n.		f.	
	SG.	PL.	SG.	PL.	SG.	PL.
NOM.	se	þa	þæt	þa	seo	þa
GEN.	þæs	þæra	þæs	þæra	þære	þæra
DAT.	þæm	þæm	þæm	þæm	þære	þæm
ACC.	þone	þa	þæt	þa	þa	þa
INSTR.	þy					

古英語の名詞は男性、中性、女性の3性を有しており、名詞自体の語形変化と修飾語の語形変化によって性数格が標示された。例えば、男性名詞は主格対格同形であるものの、修飾する限定詞や形容詞は特徴的-*ne*語尾を持つ。また、具格も名詞自体は与格と同形で独自の語尾を持たないものの、男性および中性の限定詞 *þy* などによって標示される²。具格は与格との意味の近接性などから後者に吸収されつつあったとされるが、古英語期にはいまだに独自の機能を保っていたとする研究もある (Middeke 2021: 140)。名詞の語尾に着目すると男性・中性属格は-*es*語尾を有するのに対し、女性名詞は一般的にこの語尾を持たない。しかし、*niht* ‘night’に限っては、本稿のテーマである副詞的用法で頻繁に *dæges ond nihtes* ‘day and night’ という成句で用いられたため、副詞的用法で-*s*語尾を取るようになったとされている (Shipley 1903: 111)。

² 具格の限定詞には *þon* という比較の意味を持つ小辞に遡る形式が存在し、通常の意味に加え、比較表現 (*þon mā* ‘the more’) や副詞的接続詞 (*for þon þe* ‘because’) で用いられた (Fulk 2018: 196)。

これらの格のうち、主格以外の全てが前置詞を伴わずに文中の時や場所、様態などの意味を表すことができた (Campbell 1983: 276; Sievers & Brunner 1951: 274)。例文 (1) では属格が、(2) では与格、具格が、(3) では対格が副詞的に機能している。

- (1) a. Com **nihtes** self, || þær se waldend læg | wine druncen.
came night.GEN himself where the ruler lay wine.DAT
drunk.PP³

「(神は) 主人 (ゲラル王アビメレク) がワインに溺れて横たわっているところへ**夜**に自ら来た。」⁴

GenA,B A1.1 [0821 (2634)]⁵

- b. Swā giōmor-mōd | gιοhðo mǣnde, || ān æfter eallum, | unbliðe
so sad-of-mind sorrow mourned one after all sorrowfully
hwearf || **dæg** **ond nihtes**, | oððæt dēaðes wylm ||
wandered day.GEN and night.GEN until death.GEN surging

hrān æt heortan.

touched at heart

「かくして心悲しきものは他の者が世を去った後、嘆きつつ、**昼も夜も**悲しみのうちに彷徨ってのちに死んだ。」

Beo A4.1 [0625 (2267)]

- (2) a. swā hine **fyrn-dagum** || worhte wǣpna smið, | wundrum
as him far-days.DAT made weapons' smith wonders.DAT
tēode, || besette swīn-līcum, | þæt hine syðþan nō ||
made embellishe boar-figures that him since never
brond nē beado-mēcas | bītan ne meahton.
sword nor battle-sword cut not could

「(その兜は) **古の日**に武器職人が奇跡によって作り出し、猪の型で飾ったため、以来いかなる剣によっても断ち切られることはなかった。」

³ 格などの文法標示は解釈に必要と思われる場合のみ明記する。

⁴ 以降の例文の翻訳は、明示されていない限り筆者による。

⁵ Dictionary of Old English Corpus (DOEC) からの例文の出典表記はすべて DOEC に従う。

Beo A4.1 [0414 (1448)]

b. & þy ilcan geara Offa feng to rice
 and the.INSTR same year PN took to kingdom
 「その同じ年オッフアが王位についた」

ChronA (Bately) B17.1 [026110 (755.50)]

(3) git on wæteres æht || seofon niht swuncon
 you.DU on water.GEN power seven nights.ACC laboured
 「あなた方二人は 7夜、水の上にあつて苦難を経験した」

Beo A4.1 [0140 (516)]

したがって、一つの時間名詞を用いて時間的關係を表す際には、属格、与・具格、対格、そして前置詞を用いた表現が可能であったことになる。

曲用形間の意味的相違に関して、先行研究では対格は時間の継続を表し、与格は時点や反復を、属格は文脈により時点、反復、継続を表すとされている。このように、先行研究では副詞的格の時間的意味を時点と継続、および反復に分類しているものの、実際には文献により意見の分かれる用例や時点か継続かはっきりとは分類し難い用例も存在する。また、先行研究では時点、反復、継続という区分はほとんど所与のものとして扱われており、この分類の妥当性やその判断基準などが議論されることはなかった。

そのため、本稿ではアスペクト論の観点からこうした副詞的格の表す時間的意味とその分類基準の再検討を行う。

本稿の構成は次の通りである。2 節では先行研究を概観する。2.1 節では副詞的格に関して、それぞれの曲用形の時間的意味に関する記述を見た上で、文献間で若干の意見の相違があること、とはいえ対格は時間の継続を表すという認識が共有されていることを確認する。また、それにもかかわらず継続的とは解釈し難い例文があることを指摘し、時間的意味の記述にはなんらかの理論的基準が必要であることを述べる。また、副詞的な対格が継続的に読まれるには、継続的な解釈を付与する修飾語が必要だった可能性を指摘する。そのため、2.2 節では時間の流れに関わる概念であるアスペクトに関する先行研究を確認する。特に、アスペクトという名称のもと扱われる概念には、語彙的アスペクト (状況タイプ) と文法的アスペクト (主観的アスペクト) の二種類が存在し、前者は客観的な時間の流れ、後者は主観的な時間の捉え方に関連することを述べる。3 節ではコーパスから収集した古英語の時を表す対格名詞のうち、継続的な修飾語を伴わない用例

の調査を行う。その際、名詞を意味論的特徴に応じて二つのグループに分け、境界性を持たない語が修飾語を伴わずに継続的文脈で用いられることはあるものの、境界性を持つ語だとそのような用例を見出すことが非常に困難であることを指摘する。4節ではその結果をアスペクト論的観点から考察し、5節で時点、反復、継続という画一的な記述ではなく、素性の集合で意味を記述することを提案する。

2. 先行研究

2.1. 副詞的格の表す意味

副詞的格の存在自体は広く認識されているものの、これを主な分析対象とする先行研究は限定的である。すでに1節で見た Campbell (1983) や Sievers & Brunner (1951) は格が副詞的に用いられることがある、と述べているに過ぎず、Shipley (1903) や Wülfing (1894) のような記述的な研究も個別の格が副詞的に用いられている例を列挙するにとどまっている。一方、他の格との意味が比較されることはあまりないものの、より個々の格の用法に着目した研究においては、個別の格の時間的意味の記述は見出される。

まず、与格、及び具格は意味的・形態的の近接性からまとめて論じられることが多く、(2) のように時点や反復を表すとされる (Callaway 1922: 130; Wülfing 1894: 143; Mitchell 1985: 594; Sato 2009: 22)。一方、継続を表す文脈も存在するという指摘もなされている (Callaway 1922: 129; Wülfing, 1894: 143)。Schrader (1887: 19) に至っては、与格は時間の継続を、具格は時点を表すという区別が存在すると主張している。しかし、Mitchell (1985: 594) は、Schrader (1887) の挙げる用例 (4) は確実に時点で解釈するのが妥当あるとし、その時間的解釈の難しさが垣間見られる。

- (4) **Oðrum dagum þu underfenge me on minum lymum. gyrstondæg þu**
 other days you received me on my limbs yesterday you
 underfenge me on me sylfum;
 received me on me self
 ‘On other days thou hast received me in my limbs, yesterday thou receivedst
 me in myself.’ (Thorpe 1844: 287)

ÆCHom II, 16 B1.2.190047 (163.89)

Mitchell (1985: 594) は、この例が継続でないと言える理由を明確に述べていないものの、継続読みと時点の解釈の違いはしばしば notional なものであると指摘し、

その区別が困難であることを述べている。また、与格が継続を表すという、画一的な区分に一見不都合な例の説明として、以下の Callaway (1922) によるラテン語模倣説を用いている。

Callaway (1922) は、時間の継続を表す与格はよりオリジナルな古英語散文である『年代記』や Wulfstan の説教には見られないこと、前期散文であるアルフレッド大王の作品にも見られず、後期散文になってようやく West-Saxon Gospel や Ælfric の著作などのラテン語聖書の翻訳、およびそれに基づくに作品に現れることから、ラテン語の継続的奪格の模倣であると結論づけている (cf. Mitchell 1985: 595)。

したがって、先行研究の記述に若干の揺れが見られ、継続を表す用例が存在することも確実であるものの、そのような例はラテン語の模倣として説明できるため、与格・具格は基本的には時点、反復を表す表現であるといえる。

また、時点を表す表現としては与格・具格以外に前置詞句も存在し、両者は競合関係にあったことが指摘されている。Kniezsa (1991) や Sato (2009) は副詞的格と前置詞句の比率の通時的変化を調査し、古英語後期にかけて次第に前置詞句が優勢な表現となったことを明らかにしている。

次に、対格は継続的意味を表すと、さまざまな先行研究で指摘されている (Callaway 1922: 129; Kniezsa 1986: 424; Mitchell 1985: 580; Sato 2009: 22; Yamakawa 1980: 1) ⁶。古英語前期から前置詞句との競合にさらされてきた与格や具格とは異なり、時間の継続を表す副詞類のうち、前期散文では 91.5%、後期散文でも 79.7% が副詞的対格であったという (Sato 2009: 174f)。したがって、対格は時間の継続を表す最も標準的な表現手段であったといえる。

それにもかかわらず、対格が継続以外の意味を表しているという指摘も存在する。Wulfing (1894: 267) やそれを引用する Daniels (1904: 145–146) はアルフレッド大王と Wulfstan の著作から時点を表すとされる対格の用例を挙げている。しかし、Mitchell (1985: 582) が指摘している通り、それらが継続を表すものとのように異なるのかは説明されておらず、説得力に欠けるものとなっている。例えば、Wulfing (1894: 267) は *ealne weg* ‘always’ のように時間名詞以外の用例も挙げているが、これが継続でないとと言える根拠はあげられていない。他にも *ealle þa niht* ‘all the night’, *ealne dæg* ‘all day’, *eallne ðonne giogophad* ‘all the youth’ のように *eal*

⁶ 同様の指摘は古英語以外のゲルマン諸語や他の印欧諸語にもなされている。古英語と同じく北海ゲルマン語に属する古ザクセン語については Behaghel (1966: 165)、古教会スラブ語に関しては Gardiner (1984: 93) を参照。

‘all’という継続的な修飾語を伴う名詞句や、*þa hwile (þe) ‘the while’* (‘during’) のようにむしろ時間の幅を表す表現が挙げられている。実際、Kniezsa (1986: 427) は継続の例として *ealne winter ‘all winter’* と *þa hwile (þe)* を挙げている。

以上より、時点を表す対格が存在するという意見の妥当性は低く、対格は時間の継続を表す最も標準的な副詞類として機能しているという認識が先行研究で広く共有されているといえる。

属格が表す時間的意味に関する記述は、他の格に関するものに比べ多様である。先行研究では継続(Kniezsa 1986: 424; Koike 2004: 39; Traugott 1972: 78f)、時点(Koike 2004: 39)、反復(Kniezsa 1986: 424)を表すという記述がみられ、最も包括的な記述的文献である Mitchell (1985:586) も“The adverbial genitive defines the time within which something happens”という、継続か時点かという観点とは異なる記述を試みているように思われる。この記述の多様さに関して中西 (2021b: 118) は、*dæges ond nihtes ‘day and night’* のような成句の場合には継続、反対に *dæges* や *nihtes* 単体の場合に時点として解釈できると指摘した。また、そもそも副詞的属格にどのようなものを含むかという点に関しても上述の先行研究では一致しておらず、Kniezsa は *fela ‘a lot’ + GEN.PL* のような構文を含めている一方、Koike が挙げる時点の用例は前置詞句であるように思われる⁷。 *fela + GEN.PL* の構文では時間名詞が複数属格として、*fela* 以外にも数詞などを修飾して時間的意味を表すが、ここでは主要部は時間名詞ではないと考えられるため、本稿ではこれを副詞的名詞とはみなさない。

以上の格が表す意味の相違をまとめると、次の通りである。

対格：時間の継続

与格・具格：時点、反復

属格：文献によりさまざまな記述（継続、時点、反復）。

以上から、先行研究における副詞的格の時間的意味は、継続・時点・反復に分類されていることがわかる。同様の分類は、格変化をほぼ完全に失った現代英語の時間を表す副詞的名詞句⁸の意味記述にも用いられている。実際、Tani (2010: 39)

⁷ *to hwilces timan ‘at which time’* (Koike 2004: 39)。

⁸ 理論的背景により Bare NP adverbials、Bare DP adverbials など、多様な名称で呼

や Quirk et al. (1985: 693–694) は time position, time frequency, time duration を区別している。しかし、時間的意味の分類を行う上での基準は先行研究において明確に定義されることはない上、この区分で過不足のないものであるのか、という点はこれまで議論の対象とはならなかった。先行研究に時折みられる記述の揺れは、この点が要因となっていると考えられる。

また、すでに先行研究において、対格は継続を表す基本的な表現であり、Wülfing (1894) や Daniels (1904) の主張する時点を表す対格の存在を支持する理由が少ないことを述べたが、実際には対格が明確に継続を表しているとは判断し難い用例が存在する。

- (5) Ne cwæð he þæt of him sylfum ac þa he wæs þæt ger
not says he that from him self but when he was that year
bisceop he witgode þæt se Hælend sceolde sweltan for ðære þeode
bishop he prophesied that the Saviour should die for the people
「彼は自ら（の意志で）それを言ったのではなく、**その年**大司祭であった時に、救い主が人々のために死ぬことを預言したのだった。」
- Jn (WSCp) B8.4.3.4 [0573 (11.51)]

- (6) Eadgið seo hlæfdig forðferde on Winceastre. vii. nihton ær
PN the lady died on PN 7 nights before
Cristesmæssan. & se cyng hi let bryngan to Westmynstre mid
Christmas and the king her let bring to PN with
mycclan wurðscipe & lægde hi wið Eadward king hire hlaforde;
great worship and lay her with PN king her lord
& se wæs on Westmynstre þone midwinter
and he was on PN the Christmas
「クリスマスの7晩前にエディス女王がウィンチェスターで亡くなり、王は彼女を大いなる名誉と共にウェストミンスターに運ばせ、彼女の主人であるエドワード王と共に寝かせた。王はウェストミンスターに**クリスマス**に滞在した。」
- ChronE (Irvine) B17.9 [1262 (1075.26)]

ばれる。中西 (2021a: 56) 参照。

新約聖書の古英語訳である West-Saxon Gospel の例である (5) や『アングロ・サクソン年代記』E 写本の例である (6) は、上に見た (1) や (2) とは異なり *wesan* ‘be’ という継続的動詞が用いられているという点で一見継続読みも可能なように思われる。

実際、例文 (5) を継続的対格の例とみなす先行研究も存在する。Yamakawa (1980) は、継続的対格と意味的に対応する前置詞句の発達を調査する際に、修飾語の有無などをもとに構文の分類を行い、この例を下の B タイプとした (p. 6)。

A 数詞 (不定冠詞含む)/量子子+時間 *measurement* 名詞

Ab 決定詞+数詞/数量詞+時間 *measurement* 名詞

Ac 数詞、数量詞の属格 (of 属格含む) + *space of time* を意味する名詞

B 決定詞+特定の期間を表す名詞

C (不定冠詞+時間の長さを表す形容詞+) *space of time* を表す名詞

D (all+) 所有代名詞+人生、在位期間などを表す名詞

(Yamakawa 1980: 4)

しかしながら、同じ B タイプに挙げられている他の用例は、ほぼ全て決定詞だけではなく *eall* ‘all’, *ælc* ‘each’, *aghwylc* ‘each’, *andlang* ‘all along’ などの継続読み、反復読みを喚起する修飾語を伴っており、例外は上の (5) と *þa Easterdagas* ‘the Easter days’ (HomS 10 (BIHom 3) B3.2.10 [0068 (170)]) という複数形名詞のみである。したがって、Yamakawa が挙げている用例のうち、単数形の時間名詞が継続や反復を喚起する修飾語なしで継続を表しているとされる例は (5) のみである。

また、この箇所、あるいは原典のラテン語で同じ表現が用いられているパラレルテキストの用例も (5) を継続の用例として扱うことが適切でない可能性を示唆している。

- (7) *Hyra an wæs genemned Caiphas se wæs ða on gere bisceop*
their one was named Caiphas who was then on year bishop
 「彼らの 1 人はカイアファという名で、彼はその年司祭であった」

Jn (WSCp) B8.4.3.4 [0572 (11.49)]

- (8) *And heora an cwæð þa, | Caiphas 3ehaten, || se wæs sacerð*
and their one said then Caiphas named who was priest

| on þam 3eare⁹

on the year

「そしてその時彼らの1人、カイアフアという名の、その年司祭であったものが言った」

ÆHomM 4 (Ass 5) B1.5.4 [0003 (9)]

(9) Wæs se Anna sweor þæs Caifan þe ðy gere wæs bisceop.
was the Anna father-in-law the Caiphawho the year was bishop

「アンナスはその年司祭であったカイアフアの舅だった。」

HomS 24 (ScraggVerc 1) B3.2.24 [0004 (6)]

(10) hoc autem a semet ipso non dixit sed
this.N.SG.ACC but fromhimself same not says but

cum esset pontifex anni illius

when be.3.SG.IMPF.SBJ high-priest year.GEN.SG that.GEN.SG

prophetavit quia Iesus moriturus erat pro gente

predict.3.SG.PEFR that Jesus die.FUT.PART be.IMPF for people

(Jn. 11, 51)

例 (5) のラテン語原典である (10) では、pontifex anni illius「その年の大司祭」という修飾表現が用いられており、行間グロスである Lindisfarne Gospel でも同様である¹⁰ (Skeat 1878: 113)。これは West-Saxon Gospel の Jn.18, 13 でも同様であるのに対し、Jn. 11, 49 の翻訳である (7) や Ælfric による同じ箇所 の 韻文説教¹¹ (8) では前置詞句、Vercelli Homilies (9) では具格という、むしろ時点を表す表現が用いられている。したがって、例 (5) は pontifex anni illius というラテン語表現の翻訳に対格が使用されている例として特異なだけでなく、Yamakawa (1980) の B タイプの用例としても継続的修飾語を伴わない例外的なものである。その上、パラレルテキストの表現を見ても、この用例を継続の例として積極的に認める根拠は十分ではない。

⁹ | は韻文における半行の区切り (caesura)、|| は行の区切りを表す。

¹⁰ ただしラテン語の語順は anni illius ‘year that’ であるのに対してグロスの順は ðæs geres ‘the year’ と逆になっている。それに対して 18, 13 ではラテン語に忠実な geres ðæs という語順になっている。

¹¹ Assmann (1889: 254)

このように、先行研究で継続的とされる用例を見ると、大半の用例で継続的解釈を付加する修飾語を伴っており、このことが継続読みを可能とする一つの指標であるように思われる。実際、修飾語の有無によって副詞的対格の時間的解釈に違いが生じることは、現代ドイツ語においても観察される。Schäfer (2015: 257) によると、副詞 *gestern* ‘yesterday’を時間の継続を表す対格名詞句に置き換える場合には (11b) のように *gestrig* ‘of yesterday’という形容詞だけでは不十分であり、*ganz* ‘whole’による修飾が必要になるという。

- (11) a. **Gestern** haben wir im Garten gegrillt.
 Yesterday have we in.the garden grilled
 ‘Yesterday, we grilled in the garden.’
- b. ***Den gestrigen Tag** haben wir im Garten gegrillt.
 The.ACC yesterday. ADJ.DAT day have we in.the garden grilled
- c. **Den ganzen gestrigen Tag** haben wir im
 The.ACC whole.ACC yesterday. ADJ.DAT day have we in.the
 Garten gegrillt.
 garden grilled
- d. **Am gestrigen Tag** haben wir im Garten gegrillt.
 On.the yesterday.ADJ.DAT day have we in.the garden grilled
 (Schäfer 2015: 257)

ドイツ語においても対格名詞は時間の継続を表すことができるが (e.g. *den ganzen Tag* ‘all the day’)、上の例文 (11) は *ganz* ‘whole’という継続的ニュアンスを付加する形容詞が継続相としての解釈に必須であることを示している¹²。

したがって、副詞的格の表す時間的意味の解釈は、どの形態的格が用いられているかだけでなく、どのような修飾語を伴っているかという点にも左右されるといえる。

このような修飾語による解釈の変化、あるいは継続読みが可能になる事実は、話者 (作者) による主観的時間の捉え方が時間的解釈にとって重要であり、現実世界の時間関係を考慮するだけでは副詞的格の意味解釈には不十分であることを示している。したがって、次節では時間の流れの捉え方に関わるアスペクトとい

¹² 一方、時点の解釈得るには (11d) のように前置詞句にする必要があるという (p. 257)。

う概念を確認する。

2.2. アスペクト

アスペクトはある状況の時間の流れに関わる概念として、多様な定義のもと用いられてきた。研究史においては、大きく分けて語彙的アスペクトと文法的アスペクト、あるいは客観的アスペクトと主観的アスペクトと呼ばれる、定義からして大きく異なる2つの概念が存在する (Heindl 2017: 19)。

2.2.1. 語彙的アスペクト (状況タイプ)

Heindlなどが状況タイプと呼ぶこの概念は、inherent アスペクトやアクツイオンスアルト (Dal & Eroms 2014: 105) とも呼ばれ、動詞や動詞句、さらには文中の要素が合わさることにより表される本来的時間的解釈を指す。例えば、Vendler (1957) はある動詞が進行形を取るか、どのような副詞と共に起るか、などをもとにその動詞の表す事態を活動、到達、達成、状態に区別した。

しかし、以下で見ると、このような分類は動詞だけで決定されるものではなく、動詞句内部の構造や文中での構成によっても左右される (Heindl 2017: 19)。例えば、目的語の有無や数によって解釈が変化することが知られており (Brinton 1988: 49f)、De Boel (1987: 35) は、イタリア語の動詞 *uccidere* ‘kill’の用例をあげて、それを示している ((12))。この動詞は、通常は目的語の名詞が表す対象が死んだ状態に移行して初めてその事態が真であるとみなされるが、未完了形においてはそのゴールに到達していないと解釈される。しかし、目的語が複数形である (12a) では「肉屋は複数の子牛を殺しつつあった」ということで、少なくとも一頭の子牛はすでに殺していると解釈しうるのに対し、目的語が単数である (12b) ではいまだに一頭も殺していないという解釈になる。

- (12) a. *Il macellaio uccideva i vitelli*
 the butcher kill.IMPF the.PL calf.PL
 b. *Il macellaio uccideva il vitello*
 the butcher kill.IMPF the calf.SG

(De Boel 1987: 35)

この区別は、動詞の表す動作が必然的に終わりを含意しているか (完結的であるか) のように語彙的にある程度決定される。これを Van Valin (2005) に従って素性で表すと (13) のように提示できる。

(13) 基本的な状況タイプとその素性¹³ (cf. Vendler 1957; Van Valin 2005)

状態： [+static],[-dynamic],[-telic],[-punctual]

活動： [-static],[+dynamic],[-telic],[-punctual]

到達： [-static],[-dynamic],[+telic],[+punctual]

達成： [-static],[+dynamic],[+telic],[-punctual]

(Van Valin 2005: 33 改変)

これらの素性のうち、本稿と特に関わるのは[±telic]と[±punctual]である。前者は状況が本来的な終着点を持っているか、ということと関係する。例えば、「死ぬ」という状況が真であるためには、ある人物が生きている状態から死んだ状態に移行しなければならない。そして、その移行は瞬時に起きる。最初に提示した例 (1a)、(2) では「神が来る」、「兜を作る」、「王位につく (succeed to power)」という、いずれも、神が来ていない状況から来ている状況、兜ができていない状況から兜ができた状況、王位についていない状況から王位についている状況へ移行する瞬間が存在しており、それを経過していないとその事態が真であるとは言えない。そのため、これらの例は[+telic]な事態であるといえる。一方、例 (1b)、(3) の「さまよう」、「苦難を経験する」という事態が真であるために必要な本来的終着点は存在しないため、これらは[-telic]である。

[±punctual]は事態が時間的広がりを持つか否かを表す。例えば、Van Valin (2005:34) は the ice melted は時間の広がりを持つため[-punctual]であるのに対し、the balloon popped は一瞬で起きる出来事であるため[+punctual]であるとし、この特徴がいずれも[+telic]である到達と達成の間の違いであるとしている。

一見、この[±punctual]という素性によって、ある事態が継続的か点的であるかは一意に決定されるかのようにも思える。しかし、Smith (1991: 29–30) はこの[±punctual]¹⁴という素性は理想化されたものであり、瞬間的とされる動作も厳密には若干の時間的継続を伴っていると指摘した上で、この素性を設定しない先行研究も存在することを述べている。Van Valin (2005: 34) は、[-telic]である状態と活動は定義からして[-punctual]であるとしているが、客観的事態を意味素性で表しているはずの (13) には、実際には主観が介入する余地があるということになる。実際、様々な長さの時間が時点として解釈されうること、客観的に同じ長さの時

¹³ Vendler は上の 4 つのみを区別したが、のちに単一相 (semelfactive) や active accomplishment などが加えられた。しかし、本稿では当初の 4 タイプのみを区別する。

¹⁴ Smith の用語では[±durative]。

間が時点とも継続とも解釈できることから、time position の客観的な定義は言語学的には重要ではないし、不可能であると Tani (2010: 40) は述べている。したがって、この[±punctual]という素性を考える上では、次節で述べる主観的アスペクトという概念を導入する必要がある。

2.2.2. 主観的アスペクト

状況タイプ (語彙的アスペクト) が現実世界における時間の流れに関わっているのに対し、文法的アスペクト、あるいは観点アスペクトはある状況の時間の内的構成の捉え方に関わる概念である (Brinton 1988: 2; Comrie 1981: 3)¹⁵。これは、主にある状況を全体として捉える完了体と、出来事の流れの一段面を提示する不完了体に分けられる (Heindl 2017: 30)。これは出来事を外から見ているか、内から見ているかという違いであり、そのために主観的である。Heindl の言葉を借りれば文法的アスペクトは出来事をどう捉えるか、提示するかというレンズのようなものである (Heindl 2017: 30)¹⁶。

この視点の違いは、ロシア語などのスラブ諸語では接頭辞の付加など、(12) のイタリア語などのロマンス諸語では動詞の単純形に対する未完了形などの文法的手段によって表される。現代英語でも単純形と進行形という文法的手段による表現が存在しており、前者が完了的、後者が未完了的である。このような言語に対し、古英語は確固たる進行形を有していなかったため、視点の提示には異なる手段が用いられたと考えられる。

そもそも、語彙的アスペクトと文法的アスペクトは複雑に絡まり合っているため、文法的アスペクトが議論される場面においても語彙的アスペクトは少なからぬ役割を担う (Heindl 2017: 32)。例えば、文法的なアスペクトカテゴリーを持たない現代ドイツ語のような言語では、語彙的性質や副詞という、語彙的アスペクトに関連して議論した要素が大きく関わるという (p. 32)。現在形や進行形同様、ある種の副詞や副詞句も事象の捉え方、特に特定の時間の間隔を表す (Croft 1998: 79)。そのため、進行形が未発達であった古英語でも、副詞的格との共起や、修飾語が視点の提示の仕方と関わっていると考えられる。

¹⁵ 「アスペクト」という用語はロシア語文法の vid ‘view’から 19 世紀に輸入された (Brinton 1988: 2)。

¹⁶ このような区別は、用語は違えど伝統文法でも行われており、Krause (1968: 212) はアクツィオーンズアルト(状況タイプ)を客観的、アスペクト(主観的アスペクト)を主観的であるとしている。

以上より、時間の主観的捉え方をアスペクトとする考え方に基づくと、2.1 節で確認した修飾語の有無がもたらす解釈の違いは、時間の主観的捉え方が表出されている証左になると考えられる。したがって、継続的修飾語がない場合にも副詞的対格が継続的であったのかが問題となる。

3. 分析

3.1. 分析対象

副詞的格は比較的用例数の少ない用法であり、その中でも特定の格の時間的用法に限ると、一つの古英語作品から得られる用例数は非常に限定的である。そのため、本稿では DOEC から散文における時間名詞の用例を全て収集した上で、対象となる用例を探すという手法を採る。

その際、どのような場合に副詞的名詞句が継続的であるかを判断する上で、主要部名詞の意味論の違いと、修飾語に着目する。

時間名詞には、一年や一日などの暦上の区切られた時間を表すものと、長さは定めずに時間の広がりを表すものがある。この意味論的特徴から次の二つの名詞グループを立てることができる¹⁷。

- (i) (暦などの) 特定の期間を表す名詞
- (ii) 時間の幅を表す名詞

両者の違いは境界性の有無である。(i) の名詞群は客観的な外界の時間の長さに応じて時間を人工的に区切った、境界のあるものであるのに対し、(ii) はどのくらいの長さであるかに関係なく、時間の広がりを表す名詞である。言い換えると、(i) は[+telic]であり、(ii) は[-telic]である。したがって、(ii) の名詞群は話者の主観によるさらなる捉え方の違いとしては、その長さがどの程度のものであるか程度にしかありえないことが予測される。一方、客観的な外界の時間の長さを規定する語彙である (i) の語彙群は、話者の主観による捉え方の違いにさらされやすいといえる。一年は長いのか短いのか、ある行為が行われ続ける時間なのか、それとも一瞬として捉えうるのか、話者の観点次第でさまざまに捉えることができる (Tani 2010: 40; cf. Croft 1998: 70)。

¹⁷ この他にも、ある一瞬の時点を表す *beorhthwil* ‘moment, instance’ のような名詞も存在するが、その用例数は古英語において非常に限定的であるため、今回の調査からは除いた。

今回の調査対象となった古英語の時間名詞を上の基準に当てはめると、次の Table 3 のように分類できる。

Table 3 時間名詞の意味論的分類

(i)	æfen ‘evening’, dæg ‘day’, gear ‘year’, monað ‘month’, morgen ‘morning’, niht ‘night’, sumor ‘summer’, uhta ‘dawn’, winter ‘winter’
(ii)	first ‘time’, hwil ‘while’, tid ‘time’, þrag ‘time’ ¹⁸

実際には、同じ語彙でも場合によっては表す意味が異なりうるため、この分類は絶対的なものではなく、自動的に分けることができるわけではないものの、二つのグループの名詞間には振る舞いの違いが見られる。すでに述べたように、継続的対格として用いられる際には、(i) の名詞群は数詞や full ‘full’, eall ‘all’, manige ‘many’などの時間的広がり強調する修飾語によって形容されているのがほとんどであるのに対し、(ii) に属する hwil や þrag は修飾要素なしでの継続用法を比較的容易に見出せる。

(14) Ac se heaprym þæs Godes hades þæm englicum
 but the exalted-glory the God’s state the.DAT.PL angelic
 weorodum simle ondweard wæs, þeah þe he þrage mid
 host always present was though which he time with
 us wunode
 us stayed

‘The exalted majesty of the Godhead was ever present with the angelic hosts, though He dwelt with us for a while.’ (Kelly 2003 訳)

HomS 47 (BlHom 12) B3.2.47 [0003 (10)]

DOEC の散文作品からは þrag は 14 例、hwil は 1347 例得られたが¹⁹、そのうち

¹⁸ 古英語の語彙をその意味領域ごとに分類する A Thesaurus of Old English では hwil は A stretch/period of time, A time appointed, a fixed, proper time, A day's space, An hour と、þrag は A stretch/period of time, A time, particular time, occasion と記載されている。

¹⁹ 検索ワードは þrag には boolean 検索で fragmentary、Drag or Trag、hwil には simple 検索で fragmentary、hwil とし、無関係な語や対象語彙を主要部としない複合語を手動で除外した。

前者は5例、後者は4例無修飾で継続を表していた。用例数は多いとは言えないものの、特に *prag* は比較的高い割合で無修飾のまま継続の意味を表すことがわかる。

本稿の以降の節では DOEC から収集した (i) 群の名詞のうち、副詞的用法の頻度が高い *dæg*、*gear*、*niht* の3語を対象を絞って分析を行う。3語に絞ったのは、副詞的用法は語彙によって使用傾向が大きく異なり、*æfen* や *monað* では用例が非常に限られるためである²⁰。これらの語彙が、*eall* などの継続的修飾語なし、あるいは Yamakawa (1980) の Bタイプに相当する用例を調査していく。また、その際、状況タイプの [±telic] 素性にも着目する。[-telic] な事態の場合、副詞句の意味次第では継続読みも時点読みも可能であるのに対し、仮に [+telic] な事態と副詞的対格が共起している場合には、継続的読みは極めて困難になるためである。

3.2. 用例

DOEC から収集された (i) 群名詞は *dæg* 7535 例、*gear* 3216 例、*niht* 2152 例などがあるが、本稿が対象とする構文で現れるものは非常に少なく、その中で確実に副詞的に扱われているものは50例程度しか見つからなかった。

はじめに、継続的解釈が比較的容易な例を確認していく。

(15) & heo þa eode into hire cleofæ & þær wunede ðone dæg
and she then went into her chamber and there stayed the day
& þa niht on hire bedum.
and the night on her prayer

「彼女は部屋へ行き、そこでその日と夜祈りの中に留まった。」

LS 18.1 (NatMaryAss 10N) B3.3.18.2 [0041 (139)]

この例では、一見対格の限定詞 *ðone* のみに修飾された *dæg* が継続の意味を表しているように思われるが、この場合 *dæg* and *niht* ‘day and night’ という一つのまとまりをなしているために継続的な解釈が可能になると思われる。すなわち、*day* や *night* は単体では時間の期間を表すものの、二語が一つのセットフレーズとして用いられることによりその境界性が消失し、結果的に (ii) 群の名詞と同じ性質を持

²⁰ この語彙的制約に関しては中西 (2021a) でも調査し、*æfen*、*uhta*、*wicu* ‘week’ などの副詞的用法が古英詩では確認できないことを述べたが (pp. 62f)、今回資料を DOEC の全散文作品に広げることで少数ながら用例を見つけることができた。

つようになると考えられる。ただし、niht が単体で「祈りの中にとどまる」という表現で用いられている例は他にも見られ、LS 10 (Guth) B3.3.10 [0029 (5.98)]の *þa niht in halegum gebedum wunode* ‘stayed in holy prayers the night’などは継続と見做せられると思われる。

- (16) a. *Eac swylce þone æftran dæg mid his nihte unwerig on benum*
 also such the next day with his niht untired on prayers
he þurhstod.
 he continued

「また、次の日、夜（の間も祈りを捧げていたこと）に疲れず彼は祈り続けていた」

- b. *secundo etiam die cum nocte subsequenti*
 second.ABL in-addition day.ABL with night.ABL succeeding.ABL
indefessus in precibus perstitit.
 unwearied in prayers persisted

「さらに二日目、引き続く夜に疲れず祈り続けた」

GDPref and 3 (C) B9.5.5 [0239 (14.200.7)]

(16a) はシリアからイタリアのスポレートにやって来た聖イサアクが教会の中で幾日にも渡って祈りを捧げ続けている場面である。ここでは一日目の祈りを絶え間なく終え、二日目も祈りを続けたことが語られているため、継続的修飾語はないものの継続的解釈が自然であるように思われる。ただし、この文では動詞 *þurhstandan* がその解釈に影響している可能性がある。*þurh* ‘through’は前置詞としては継続表現を表す際に用いられ、副詞としての用法も見られている。また、Hecht (1900) の校訂版では動詞の接頭辞として扱われているものの、写本²¹では行を跨いでおり、はっきり接頭辞であるとは判断できない。それに加え、*þurhstandan* の用例は Bosworth & Toller の辞書ではこの一例しか挙げられておらず、DOEC から他の用例は見出せなかった。したがって、この Hapax legomenon の正確な意味を読み取るにはやや難があるものの、ラテン語原文の *perstitit* (< *perstō*)²² との対応を考えると ‘continue’ という解釈で問題ないと考えられる²³。なお、ラテン語

²¹ Cambridge, Corpus Christi College, MS 322, 78v.

²² To continue resolutely in an attitude, activity, or sim., persist, stand firm (w. in + abl) (Glare 2012: 1495)

²³ de Vogüé (1979: 305) の訳では ‘le second jour qui s'ensuivit, infatigable, il persista

原典でも *secundo die* ‘second day’ という奪格が用いられているため、時間解釈で問題ないと思われるが、古英語だけをもとに解釈するならば、先行する *he stod in his gebede ealne dæg & þam dæge þa æfterfylgendan nihte he to geþeodde* ‘he stood in his prayer all the day and to the day he added the following night’ という文中の動詞 *geþeodde* ‘added’ の目的語として解釈することも不可能ではないと考えられる。

次に継続的とも点的とも解釈でき、明確な判断がし難い例を確認する。

(17) & hi didon swa, & he sealed him andlifene wiþ horsum &
and they did so and he gave them food for horses and
wiþ hriðerum & wið sceapum & wið assan, & fedde hi þæt
for oxen and for sheep and for asses and fed them that
gear wið heora orfe.
year for their cattle

「彼らがそのようにすると、彼は馬と牛と羊とロバと交換で食糧を彼らに与え、彼らをその年家畜と交換に養ったのである」

Gen B8.1.4.1 [1043 (47.17)]

(17) は旧約聖書『創世記』の 47 章 17 節の翻訳であり、この箇所はこの用例では *fedan* ‘feed’ という活動動詞が用いられているため、動詞の意味論的特徴は [-telic] である。欽定訳聖書でもこの箇所は継続的に訳されている。数少ない限定詞による修飾のみで継続を表している例とも考えられるが、粒度の荒い観点から過去の出来事を述べている（「その年の間家畜を養った」ではなく「その年家畜を養った」）と考えると点的解釈も不可能ではなく、決め手に欠く。

(18) a. Ða cwæð he hlaford, læt hine gyt þis gear, oð ic hine
then said he lord let him yet this year until I him
bedelfe & ic hine bewurpe mid meoxe
dig and I him throw with dung

「すると彼は言った、『ご主人、今年それ（木）を放っておいてください、私がそれを耕して肥やしをかぶせるまで』」

b. at ille respondens dixit illi domine dimitte illam et
but he responding said him lord.VOC leave.IMP him and

dans ses prières’ となっている。

hoc anno usque dum fodiam circa illam et
 this.ABL year.ABL until until dig.1.SG.FUT around it and
 mittam stercora
 put.1.SG.FUT dung

Lk (WSCp) B8.4.3.3 [0571 (13.8)]

(18) ではイチジクの木を農園に植えたものの、3年間一度も実をつけていないことを理由に農園主が木を切るよう言ったことに対する農夫の返事である。「もう一年間」ということなので継続とも読めるが、一年を点的に読む解釈もできるため、曖昧な例であるといえる。

(19) & þa swa se Godes þeowa wæs genyded fram werignysse
 and then as the God's servant was compelled from weariness
 his geferana, þæt he wunode þa niht on his mynstre.
 his fellow that he stayed the night in his monastery
 「そしてその神の僕は、同行者たちの疲労ゆえ、彼の修道院にその夜留
 まることを強いられた」

GD 1 (C) B9.5.2 [0219 (4.38.23)]

(19) では wunian ‘stay’ という [-telic] な状態動詞が þa niht という限定詞付きの名詞と共起している。状態動詞は現代英語では時点の副詞句とも共起しうる（出水 2023: 25）ため決定的な判断は困難である。niht は (19) のように限定詞で修飾された例だけでなく、sume niht(e) ‘some night’ という構文でも用いられる²⁴。

(20) a. þa eode he sume neahte on ise unwærlice, þa gefeoll he
 when went he some night on ice incautiously then fell he
 semninga on his earm ufan, & þone swiðe geðræste & gebræc
 suddenly on his arm above and it very hursted and broke
 「ある晩彼が氷の上を不注意に歩いていると、不意に腕の上に転び、
 痛めて折ってしまった」

²⁴ 内一例 (Mart 5 (Kotzor) B19.5[0815 (Au 3, A.4)]) は frigeniht ‘Friday night’ という複合語。

þam candelstafum beforen hire ræste.
 the candle-staffs in-front-of her bed

「まことに、ある晩それは起きたのだ。彼女がその癌の病に苦しんで寝ていると、その時不意に、祝福されし使徒聖ペテロが彼女の床の前の燭台の間に立っているのを見たのだ。」

GDPref and 4 (C) B9.5.6 [0191 (14.280.3)]

例 (21) ではロムラがレデンタを呼んだという事態が描かれているため、ここでは[+telic]な状況タイプであると考えられる。同様に、(22) の *gelimpan* ‘happen’ は明確に[+telic]な到達動詞のため、継続読みは困難である。

以上の分析結果をまとめると、今回調査対象とした、継続的修飾語を伴わない (i) 群名詞の例にはより継続的解釈が相応しいと読めるもの、点的解釈が相応しいもの、また、どちらの解釈も許すものがあるといえる。中でも、点的解釈が相応しいものは *sume niht(e)* の用例に多く見られた。

4. 考察

以上の分析結果を素性の面から検討する。時点読みが困難な例 (15)(16) はいずれも [-telic]である活動の状況タイプを表している。(17) も *fedan* ‘feed’は活動の用例であるとも思えるが、ここでは時点読みも可能であるように思われた。意味的特徴から考えると、*feed* は *eat* の使役的ペアであると考えられるが (Brinton 1988: 77)、*eat* は活動と達成両方で用いられうるためである (Croft 2012: 39)。したがって、継続的修飾語を伴わない副詞的対格の意味素性をはっきりしない以上、話者の視点がどの程度の粒度で時間の流れを捉えているのか明らかにすることは困難であると思われる。

また、(5) のように状況タイプが状態である場合にも、修飾語の助けなしで時間的流れの粒度を捉えることには困難がある。というのも、状態は時点の副詞とも共起するためである (出水 2023: 25)。実際、例 (7)-(9) も状況タイプは同じく状態であるが、時点を表すとされる副詞句と共起している。

このように、修飾語による解釈の助けを得ることができず、複数の解釈を許しうる用例をどのように記述するかは、母語話者の存在しない古語の研究においては難問である。特に、仮に母語話者がいても、どちらとも解釈できる用例というものは存在すると思われる。そのため、従来の時点か、継続かという明確な区分には限界がある。この問題の一つの解決策として、動詞と名詞の意味論的特徴、および継続的修飾語の有無に関する素性の組み合わせを用いて時間的意味を記述

することを提案する。

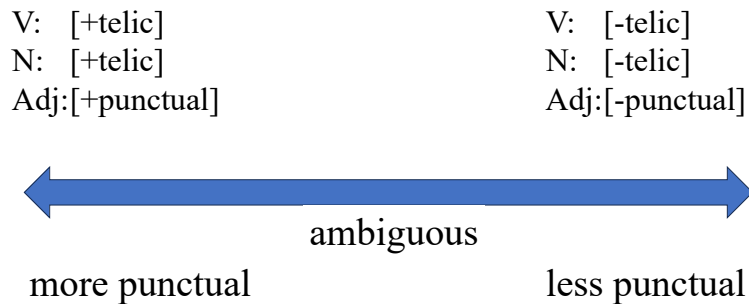


Figure 1 時間的意味解釈の記述

Figure 1 では動詞、名詞、形容詞をそれぞれ V、N、Adj で表し、その素性によって、より点的、より継続的と記述する手法が提案されている。例えば、(2) の例のように、「王国を手に入れる」(feng to rice) という [+telic] な述語が、[+punctual] な修飾語を持たない ‘year’ という [+telic] な副詞的名詞とともに用いられる場合には、典型的な時点を表す用例であると考えることができる。一方、(14) では wunian ‘stay’ という [-telic] な動詞が prag という [-telic] な名詞と共に用いられているため、継続的解釈が優勢となる。prag が散文中で [-punctual] な修飾語と共に起している例はないものの、同様の性質を持つ hwil は eall ‘all’ などと共に起することが可能であり、その場合はさらに継続的であると言える。

この点を踏まえると、先行研究においては時点と呼ばれている用例は [+telic] なタイプだと考えられる。一方、継続とされていたものは [-telic]、[+static] であるようなタイプであると考えられる。しかしながら、すでに述べたように、状態動詞は時点を表す副詞とも共起しうることが知られているため、どのようなものを時点の副詞とみなすか、という点で解釈の齟齬が生まれていたのだと考えられる。対格は一般に継続を表すとされており、先行研究においてその点に疑義が挟まれることはほとんどなかったため、(5) のような用例も Yamakawa (1980) などでは継続の用例だと解釈されたものと思われる。

5. 結論

本稿では、アスペクトは主観的な時間の捉え方であり、客観的に同じ長さの時間は時点とも継続ともみなしうるとの立場から、従来の副詞的格の意味記述に用いられてきた分類法を見直した。従来の継続・時点・反復という区別の基準が先

行研究において明確に定義されておらず、この分類法に基づく場合、客観的に幅のある時間を表す名詞を主要部とする副詞類と継続的な動詞が共起する場合にも、より時間の継続性に焦点が当たった文脈と、反対に時間の幅が背景化しているような文脈を区別できないという問題が生じることを指摘した。

本稿では名詞の客観的時間の長さは話者の主観性によってさまざまに捉えられること、また、それによって gear ‘year’のように客観的には幅のある時間を表す名詞も点的に捉えられうることを主張した。その上で、時点・継続の明確な判断ができない用例における副詞的な意味の記述法として、状況タイプ、名詞、修飾語の素性を合わせるという方法を提案した。

6. 課題

本稿では、古英語という用例の解釈に母語話者の直感を使用できない言語の時間的意味の記述に際し、現代語の研究成果を参考として素性で表すという提案を行なった。そのため、究極的には厳密な解釈を知りようがない用例への解釈を、理論的枠組みで決めてしまうという強引な試みであるという批判は免れない。また、現代語に当てはまる理論が必ずしも古英語に当てはまるのかという問題も詳細に検討しなければならないものである。

データ分析に関しても改善の余地がある。古英語で比較的頻度の低い現象である副詞的格の中のごく一部を対象としたため、用例の収集はコーパスに頼らざるを得ず、テキストの解釈も文献学的アプローチから求められるほど丁寧に行えていないのも事実である。同様に、今回扱った古英語作品には複数の写本が存在しており、複数の写本間の異同等も本来は考察すべきである。また、写本に記されている語形は必ずしも当時の言語を反映している訳ではなく、しばしば写字生の誤り、過剰修正なども含む可能性がある上、ラテン語の文法に影響を受けている可能性も否定はできない。さらに、古英語末期にかけて次第に格が融合していく事実を考慮すると、一見対格形に見える語形が必ずしも対格を反映している訳ではない可能性すら排除はできない。例えば、継続読みが困難な[+telic]な事態を表す用例 (21) と (22) いずれでも *sume niht(e)* という副詞的格と共に用いられていたが、これは *sume niht(e)* が全体で 8 例しかないことから考慮すると非常に高い割合である。女性形形容詞は与格では *-re* 語尾を持ち、具格は存在しないため、*-e* 語尾は形態的に対格であると判断したものの、意味的にパラレルを成す *sume dæge* という具格が頻繁に用いられることを考慮すると、ここに何らかの類推的变化が起きていた可能性も否定できない。実際、Mitchell (1985: 595) も *Blickling Homilies* に見られる *æghwylce niht* ‘each night’や *ælce niht* ‘each night’が対格では

ない可能性があるという疑問提起を行なっている。そのため、作品ごとの、格の融合具合も今後調査していく必要がある。

略記号一覧

文法用語

ABL	= ablative	IMPF	= imperfect
ACC	= accusative	INSTR	= instrumental
ACT	= active	NOM	= nominative
ADJ	= adjective	PL	= plural
COMP	= comparative	PN	= proper noun
DAT	= dative	PRES.PART	= present participle
DU	= dual	SBJ	= subjunctive
FUT	= future	SG	= singular
FUT.PART	= future participle	VOC	= vocative
GEN	= genitive		

作品名と使用刊本²⁵

- ÆCHom II, 16 = Easter: Godden, Malcolm. 1979. *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series, Text*, 161-164. Early English Text Society.
- ÆHomM 4 (Ass 5) = Homily for Friday after the Fifth Sunday in Lent: Assmann, Bruno. 1889. *Angelsächsische Homilien und Heiligenleben*. Bibliothek der angelsächsischen Prosa 3, 65-72. Kassel: Georg H. Wigand.
- Bede 3 = Bede, History of the English Church and Nation, Book 3: Miller, Thomas. 1890. *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People. Edited with a Translation and Introduction. Part 2*. Early English Text Society.
- Bede 4 = Bede, History of the English Church and Nation, Book 4: Miller, Thomas. 1890.
- Beo = Beowulf: Wrenn, Charles Leslie, and Whitney French Bolton. 1996. *Beowulf with the Finnesburg Fragment* (5th ed.) University of Exeter Press.
- ChronA (Bately) = The Parker Chronicle (Corpus Christi College, Cambridge MS. 173): Bately, Janet. 1986. *MS A: A Semi-Diplomatic Edition with Introduction and Indices*. Cambridge: D.S. Brewer.
- ChronE (Irvine) = Oxford, Bodleian Library, MS. Laud Misc. 636: Irvine, Susan. 2004. *The Anglo-Saxon Chronicle: 7. MS E: A Collaborative Edition*. Cambridge:

²⁵ 古英語の引用例文の省略記号は DOEC に従っているものの、参考にした校訂本は新しいものが入手できる場合には DOEC とは異なるものを採用した。

- Brewer.
- GD 1 (C) = Gregory the Great, Dialogues, Book 1: Hecht, Hans. 1900. *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, 11-92. Leipzig: Georg H. Wigand's Verlag.
- GDPref and 3 (C) = Gregory the Great, Dialogues, Preface and Book 3: Hecht, Hans. 1900. 179-259.
写本 Cambridge, Corpus Christi College, MS 322.
(<https://parker.stanford.edu/parker/catalog/ks785nk0024>)
- GDPref and 4 (C) = Gregory the Great, Dialogues, Preface and Book 4: Hecht, Hans. 1900. 260-350.
- Gen = Genesis (London, British Library, MS. Cotton Claudius B.IV): Marsden, Richard. 2008. *The Old English Heptateuch and Ælfric's Libellus de Veteri Testamento et Novo, Vol. 1: Introduction and Text*. Oxford University Press.
- GenA,B = Genesis: Doane, Alger Nicolaus. 1978. *Genesis A: A New Edition*. University of Wisconsin Press.
- HomS 24 (ScraggVerc 1) = In Parasceve: Scragg, Donald G. 1992. *The Vercelli Homilies. Early English Text Society, Os 300*, 16-42. Oxford: Oxford University Press.
- HomS 47 (BIHom 12) = Pentecost: Morris, Richard. 1874. *The Blickling Homilies*. Vol. 3, 131-7. London: Published for the Early English Text Society, by N. Trübner & Co., 57 & 59 Ludgate Hill, E. C.
(https://www.yorku.ca/inpar/Blickling_Morris.pdf)
参考資料 Kelly, Richard J. 2003. *Blickling Homilies: Edition and Translation*. A&C Black.
- Jn = Weber, Robert, and Roger Gryson (eds.) 2007. *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem* (5th ed.) Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft. (『ヨハネの福音書』)
- Jn (WSCp) = John (Cambridge, Corpus Christi College, MS. 140): Liuzza, Roy M. 1994. *The Old English Version of the Gospels*. Oxford University Press. (West-Saxon Gospel 『ヨハネの福音書』)
- Lk (WSCp) = Luke (Cambridge, Corpus Christi College, MS. 140): Liuzza, Roy M. 1994.
- LS 10 (Guth) = Saint Guthlac: Gosser, Paul. 1909. *Das angelsächsische Prosa-Leben des heiligen Guthlac: mit Einleitung, Anmerkung und Miniaturen*, 117-34. Heidelberg: Carl Winter.
- LS 18.1 (NatMaryAss 10N) = Nativity of Mary the Virgin (Oxford, Bodleian Library,

MS. Bodley 343): Assmann, Bruno. 1889. 117-137.

その他の一次文献

- Bosworth, Joseph, Thomas Northcote Toller, Christ Sean, and Ondřej Tichy. (eds.) 2014. purh-standan. In *An Anglo-Saxon Dictionary Online*. Prague: Faculty of Arts, Charles University. (<https://bosworthtoller.com/59615>) (最終閲覧 2023/12/18)
- diPaolo Healey, Antonette, John Price Wilkin, and Xin Xiang. 2009. *Dictionary of Old English Web Corpus*. Toronto: Dictionary of Old English Project. (<https://tapor.library.utoronto.ca/doecorpus/index.html>) (最終閲覧 2023/11/21)
- Roberts, Jane, Christian Kay with Lynne Grundy. 2017. *A Thesaurus of Old English*. Glasgow: University of Glasgow. (<http://oldenglishtesaurus.arts.gla.ac.uk/>) (最終閲覧 2023/10/01)

二次文献

- Assmann, Bruno. 1889. *Angelsächsische Homilien und Heiligenleben*. Bibliothek der Angelsächsischen Prosa 3. Kassel: Georg H. Wigand.
- Behaghel, Otto. 1966. *Die Syntax des Heliand*. Wiesbaden: Dr. Martin Sändig oHG.
- Brinton, Laurel J. 1988. *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*. Cambridge Studies in Linguistics 49. Cambridge [Cambridgeshire]/New York: Cambridge University Press.
- Callaway, Morgan. 1922. The Dative of Time How Long in Old English. *Modern Language Notes* 37 (3): 129–41.
- Campbell, Alistair. 1983. *Old English Grammar*. Book, Whole. Oxford: Clarendon Press.
- Comrie, Bernard. 1981. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. 1998. “The Structure of Events and the Structure of Language.” In Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 67–92. New York/London: Psychology Press.
- Croft, William. 2012. *Verbs: Aspect and Causal Structure*. OUP Oxford.
- Dal, Ingerid, and Hans-Werner Eroms. 2014. *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage* (4th ed.) De Gruyter.
- Daniels, Antonius Jacobus. 1904. *Kasussyntax zu den (echten und unechten) Predigten Wulfstans*. Leiden: G. F. Théonville.

- De Boel, G. 1987. Aspekt, Aktionsart und Transitivität. *Indogermanische Forschungen* 92 (December): 33–57. <https://doi.org/10.1515/9783110243345.33>.
- Fulk, Robert Dennis. 2018. *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Gardiner, Sunray Cythna. 1984. *Old Church Slavonic: An Elementary Grammar*. Cambridge: Cambridge university press.
- Glare, P.G.W. (ed.), 2012. *Oxford Latin Dictionary* (2nd ed.) Oxford: Oxford University Press.
- Heindl, Olga. 2017. *Aspekt und Genitivobjekt. Eine kontrastiv-typologische Untersuchung zweier Phänomene der historischen germanischen Syntax*. Tübingen: Stauffenburg.
- Kelly, Richard J. 2003. *Blickling Homilies: Edition and Translation*. A&C Black.
- Kniezsa, Veronika. 1986. The Progress of the Expression of Temporal Relationships from Old English to Early Middle English. In Kastovsky, Dieter, and Aleksander Szwedek (eds.) *Linguistics across Historical and Geographical Boundaries: Linguistic Theory and Historical Linguistics 1*, 423–36. Berlin/New York/Amsterdam: Mouton De Gruyter.
- Kniezsa, Veronika. 1991. Prepositional Phrase Expressing Adverbs of Time from Late Old English to Early Middle English. In Dieter Kastovsky (ed.), *Historical English Syntax*, 221–31. Berlin/New York: Mouton De Gruyter.
- Koike, Takeshi. 2004. *Analysis of the Genitive Case in Old English within a Cognitive Grammar Framework, Based on the Data from Ælfric's Catholic Homilies First Series*. Ph.D. Dissertation, University of Edinburgh.
- Krause, Wolfgang. 1968. *Handbuch des Gotischen*. München: Beck.
- Middeke, Kirsten. 2021. *The Old English Case System*. Brill.
- Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax: Vol. 1: Concord, the Parts of Speech, and the Sentence*. Oxford: Clarendon Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartoik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- Sato, Kiriko. 2009. *The Development from Case-Forms to Prepositional Constructions in Old English Prose*. Peter Lang.
- Schäfer, Martin. 2015. Adverbs in Unusual Places. In Karin Pittner, Daniela Elsner, Fabian Barteld (eds.), *Adverbs*, 239–72. John Benjamins.
- Schrader, Bernard. 1887. *Studien zur ælfricschen Syntax: Ein Beitrag zur altenglischen*

- Grammatik*. Jena: Verlag von Hermann Pohle.
- Shipley, George. 1903. *The Genitive Case in Anglo-Saxon Poetry*. Ph.D. Dissertation, Johns Hopkins University
- Sievers, Eduard, and Karl Brunner. 1951. *Altenglische Grammatik nach der angelsächsischen Grammatik* (2nd ed.) Halle (Saale): Max Niemeyer.
- Skeat, Walter William. 1878. *The Gospel According to Saint John, Vol. 4: The Holy Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions: Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the Mss.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Carlota S. 1991. *The Parameter of Aspect*. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Tani, Mitsuo. 2010. Three Semantic Facets of Temporal Adverbial NPs in English. 『宇都宮大学教育学部紀要』第 1 部 60: 39–46.
- Thorpe, Benjamin. 1844. *Sermones Catholici, or, Homilies of Ælfric: In Original Anglo-Saxon, with an English Version*. London: Printed for the Aelfric society.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1972. *A History of English Syntax: A Transformational Approach to the History of English Sentence Structure*. The Transatlantic Series in Linguistics. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Van Valin Jr, Robert D. 2005. *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge University Press.
- Vendler, Zenon. 1957. Verbs and Times. *The Philosophical Review* 66 (2): 143–60.
- Vogüé, Adalbert de. 1979. *Dialogues / Grégoire le Grand; Introduction, Bibliographie et Cartes par Adalbert de Vogüé*.
- Wülfing, J. Ernst. 1894. *Die Syntax in den Werken Alfreds des Grossen, Vol. 1*. Bonn: P. Hansteins Verlag.
- Yamakawa, Kikuo. 1980. The Adverbial Accusative of Duration and Its Prepositional Equivalent Part I. Old and Middle English. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 21: 1–39.
- 中西志門. 2021a. 「古英語の副詞的格の用法と Time Position の特定可能性について: ~'day' と 'night' の用例を中心に〜」 『言語科学論集』 27: 55–79.
- 中西志門. 2021b. 「古英語詩『ベオウルフ』と『創世記A』における 'Day' と 'Night' の副詞的用法と前置詞句の対立—その語彙的傾向—」 『人間・環境学』 30: 113–23.

出水孝典. 2023. 『語彙アスペクトと事象構造（上）時間特性を診る 14 章』. 東京: 開拓社.

**On the aspectual interpretation of the temporal meaning of the
adverbial accusative in Old English:
telicity and granularity**

Shimon Nakanishi

This paper reexamines the temporal meaning of the adverbial accusative in Old English from an aspectual perspective and points out that, although the accusative is traditionally considered to denote duration of time, there are examples that fail to demonstrate durative connotation. Therefore, in order to deal with the difficulty of judging temporal meaning, this study proposes to describe it by combining semantic features of the verb, noun and the adjective in a sentence.

Temporal meanings of the Old English adverbial cases were described as durative, punctual, or iterative in the previous literature. However, no clear criterion of distinction is indicated, nor is there any discussion as to whether this categorialization is legitimate or sufficient. There are also cases where the same sentence is interpreted differently among various scholars.

Therefore, this paper bases the discussion on the aspectual theory according to which objectively the same length of time can be construed differently depending on the granularity of the temporal interpretation and maintains that the clearcut distinction of temporal meanings, especially in dead languages, is impossible. Hence, to describe those in Old English as objectively as possible, it is required to resort to the combination of features of the linguistic elements involved in the sentence.